

## 會 長 就 任 挨 拶

會 長 星 合 正 治

## 1 吾等は戦に敗れた。

昭和20年8月15日以後の一箇月は、嵐の後の碧空を縦横に飛び交ふ大小無数の米機を夢かと眺めた。焼野原の道路を軽快に去る Jeep の姿を現かと疑つた。二箇月経過した今日になつて、敗戦の實相をやつと正視し、確認し得るの心境に到達する事が出来た。吾等は確かに敗れたのだ。

省れば昭和16年12月8日の朝、米英兩國と交戦状態に入つた由を告ぐるラヂオ放送の聲は今尙耳朶に残つてゐる。時、終に到れり。戦はん哉いざ。其の日迄、米英兩國の壓迫感に悩まされてゐた吾等が此の時と許りに晴れ晴れした氣持で立ち上つた事は事實であつた。否、夫より以前、昭和6年9月18日、柳條溝の銃聲に滿洲事變が勃發した當時、林朝鮮軍司令官の執つた應急の非常處置を、驕氣ながらも當然と宜なつた。昭和11年2月26日早曉の反亂事件の意義さへ、部分的には肯定する氣持もあつた。昭和12年7月7日、北支、蘆溝橋に開始された支那事變、夫が不擴大主義を採つた近衛内閣の方針を幾分手緩しとさへ考へた。昭和15年、日獨伊三國協定の成立、ヒットラー、ムッソリーニの獅々吼を聞いては、物語にある英雄の現世に於ける實在に改めて景仰の念を禁じ得なかつた事でもある。之等は吾等日本人の多くが経験した實感と思ふ。そして、今にして思へば、之等は總て過去何年か、誤つた指導者の宣傳によつて歪曲されて來た吾等の誤つた判断であつたのである。

明治維新以來、我國の前進振りは實際素晴らしいものであつた。維新當初の先覺者が採つた國家發展の方針——明治天皇の五箇條の御誓文に表現されたあの御精神に基く指導方向に誤りは無い。斯くして我が國勢は明治27、8年、明治37、8年、兩度の國難に能く打ち勝つて隆々伸張の一途を進んだ。然るに大正年代を経て昭和の初期迄の我國の進展振り、特に前世界大戰以後に於て吾等自ら稱へた我國の國際的地位は果して一流國家としての實力に裏付けられて居たか如何。國民全般は他力的の位置向上、空中樓閣的發展に眩惑され、指導者達も我が國力に科學的資料に基く確實な判断を下さず、所謂竹槍三萬本論の代表するが如きドンキホーテ式の自己陶醉に自ら誤り驅られて、我國を今日の事態に引き込んだのではなかつたか。敢て云ふ。舊い時代の通念からすれば、國力膨張の捌口を海外に求めると云ふ其の行き方に誤りは無かつたと云へよう。然し、之が爲に採つた手段が不當であつた。又、時代の推移を見るの明が無かつた。更に、自惚れて自己の誤りに氣が付かなかつた。結局は指導者に大局からする本當の正しい發展の道が見えなかつた。斯くして順當に敗れる可くして敗れて了つたのである。

遮莫、吾等は戦つた。強大米國を先頭に世界の殆ど凡有る國々を相手にして戦つた。渾身の力を致して戦つた事自體、本會々員諸君は、國民大衆の一部として、恐らく夫々に省みて悔なき事と信ずる。

2 吾等當面の任務は、國民の全部を舉げて、聯合國側の指示する所謂ポツダム宣言の各條項を如何に忠實に實行するか、並に此の狭少な國土内に八千萬に近い國民が如何にして生活の安定を保つかの兩項以外には出でない。

米國の指導に依つて、國民各個の自由は各々に返還された。換言すれば、國民は其の好むと好まざるとに拘らず、個々の判断と責任とに於て、上記の任務を達成せねばならぬ。

言論が自由になつて、吾が國體に關しては國民各個の意見が盛に發表されるであらう。そして、此處暫くは、或は思想的に相當の困亂状態に陥るかも知れぬ。然し、其の間に國民は却つて自ら國體を正確に認識するの機會を得て、眞の意味の國體明徴——從來の強られた神憑りの國體明徴論でない、

各自の自覺から醇化された國體明徴の姿が吾等の眼前に出現するに相異なる。他方、海外諸國は、從來と異り、赤裸々な日本を色眼鏡なしに正視して呉れる様になり、八紘一字——之迄云はれて居た様な特殊の含みのない、文字通り萬邦共榮の大理想が實現するに到るであらう事を信ずる。

扱、次に此の限られたる狭き國土内に多數の國民を如何様に收容するかは、此處當面の大問題であり、安定なる衣食住の寄所を將來何處に求む可きかは、此の際充分考慮して、誤りない方向を見極めておく必要がある。國內の農耕生産のみを以つてしては到底國民の必需食料を満す事が出来ない。漁業海面も著しく縮小された。勿論科學的方法を充分に導入して、之等狭少なる收穫面積を最高能率に活用する事は、今後の科學界に課せられた重要問題である。

夫にしても、到底夫丈けを以つてしては日本人全體に必要な食糧を供給し難いとは、夫々の専門的調査の結果として、最近の新聞紙上にも屢々論ぜられてゐる處で、此の不足分は如何しても海外よりの輸入に俟つの外はない。海外よりの食料の輸入を必須とすれば、之が代替として何等かの國內産業製品を海外に提供する必要あり、現に最近當面の食料飢饉を打開する緊急處置として、我が政府が提出した糧米三百萬噸輸入の許可申請に對し、聯合國軍總司令部より代替品としての生糸を要求されたるが如き、吾人の耳目に尙新なる一例である。

唯、問題は此の種の代替産業製品として、將來、何を選び、何を提供すべきかは、近き將來に於ける我國重要産業の方向を決定すべき目下の大問題と思惟する。抑々蠶業は吾等の主食たる米穀の生産と並んで、本邦古來の重要産業であり、生糸の生産は農家の最重要副業として採り上げられて來たものではあるが、海外よりする糧米輸入の代替品として之を見る時、今日以後の吾が國情は果して此の行き方が、依然、最有利であるか否か大いに検討の餘地あり。即ち、生糸の生産には桑樹の栽培が必要であるが、一般食料の生産にさらでだに不足の耕地面積を之が爲に割愛する事は如何にも惜しい。換言すれば、將來の日本は其の缺く可らざる不足食料入手の方便として、國內に農耕適地を占據せざる體の産業、即ち適當なる工業を興し、之が製品を海外に提供す可きであり、此の意味に於て、將來、本邦立國の基礎を少くとも農業と同等、或は寧ろ夫以上に工業に置かねばならぬ所以は、敢て複雑なる數値計算を行はずとも明かなる事實である。

而して、又、同様の意味に於て、此の種工業は、從來の都市を中心とした専門工場による集中工業と併んで、大河内博士の提唱され、又、既に一部實踐されつゝあつた如き、農家の副業としての分散工業形式を採用する事が切に望ましいのではないか。

以上は限られたる土地に龐大なる人口を擁する本邦の單なる國內問題としての見地よりする工業立國序論であるが、他方、將來、我國が許されて海外諸國の仲間入りをする際に於ては、對海外諸國との交誼の手土産として、何を海外に送る可きかが、又、別個の問題として考慮されねばならぬ。其の際、吾等は何を以つて海外に寄與すべきか。我國は富士山を以つて代表される通り、到る處眞に風光明媚である。海外諸國の方々はこの美しい天然を觀賞に是非本邦に來て頂き度い。夫丈けでは勿論問題にならぬ。我國には京の西陣、加賀の九谷等、高級な美術的特産品が種々ある。海外の人達は此の見事な工藝品を御土産にしてお持ち歸り頂き度い。之丈けでは我國が各國に伍して新時代の世界文化に寄與するのに不充分であらう。我國は新しい科學、近代の技術を以つてする我國独自の工業製品を携げて新に海外諸國の仲間入りをせねばならない。

冷靜なる客觀的見地よりして、戰時中、否、明治開化以來の我國の工業、我國の技術發展の方向を顧みると、夫は餘りにも散兵線的であつた。餘りにも間口が廣過ぎた。餘りにも特色が無かつた。自ら然かあつた所以のものは、要するに單なる軍備を以つて唯一の海外對抗策、武力を以つてする謾然たる國力増強策を以つて其の基調としたからではなかつたか。換言すれば海外文化諸國と肩を並べんとする所謂國力の寄り所を、短見的にも武力偏重に置いた爲ではなかつたか。謂はゞ、舊式の貧弱な船體に最新式の巨大な大砲を積載した軍艦の様なもの、艦の位置を適當に正して放つた最初の一彈丈けは幸に目標を衝き得たけれど、亂戦になつて砲の方向を左右幾回轉かする内に艦の重心が外れて

自ら顛覆するに至つたと云ふのが、今回の大戦の眞情ではなかつたか。

従つて、工業發展の基本たる研究分野を見ても、餘りにも方面が廣過ぎて、我國の貧弱なる人的、物的資力を以つてしては、到底之を海外一流の根底の深い實力に對抗する事が出来ない。之を電波警戒機のブラウン管面に現はると螢光像でたとへれば、米英兩國の科學、工業力は、充分に絞つた平滑明確な基線そのものであり、之に對する我國の技術力は絞りを一杯に開けた雜音像の如く、其のピークの一本一本が吾が科學陣の研究成果に過ぎなかつた。我國に世界的の研究ありと思つたのは、其の雜音ピークの高さが海外の平滑な輝線と高さを等しうしただけである。獨創的大發明とは、電源の變動か何かで、時々、突發的に現れた少々高いピークの一、二本に外ならなかつた。今回の戦争は、彼にあつては其の平滑な基線上に截然明確に現はれた感5に及ぶ影像を求めるにあり、我に於ては雜音像中に埋もれた精々感1~2程度の反射像を探す努力に終始したのではなかつたか。實力の相異斯くの如しとすれば、科學戰の歸趨は初めよりして明と云ふより外はない。

飛つて今後は如何。米英が堂々たる大戦艦とすれば、我は小形の、而も商船に過ぎぬ。今後は徒に外被を薄くして、外形の大を競ふ必要はない。スポーツ用の輕快なヨットを目指しても宜し、或は風波の穩かな湖水面を行き交ふ遊覽船を目標としても差支へない。唯、望ましきは、ヨットはヨットなりに、遊覽船は遊覽船としての範疇内で、世界的に斬新な、裝備の完全な、内容の充實した最優秀船を作り上げ度い。

今や、我國は外面的見地からは餘儀なく武装を解除された。而も内面的に之を觀れば無理算段して武備を行ふ必要がなくなつた。工業力、技術力としても、前記の如き意味で間口を廣うするに及ばなくなつたのである。國際的に我國の位置は既に所謂四等國以下に低下した。研究陣としても苦勞した絞りを一杯に開いて一面に雜音のピークを出し、其の針の先きで海外に於ける科學研究の最前線と高さを争ふの愚をなす要がなくなつたのである。ならば、器材の質の向上を計つて雜音を去り、其の代り従來の各雜音ピークの夫々に費した power を集結して、特に明快な、尖鋭な影像を一本、海外の偉大な固定反射像に並んで、くつきりと出し度い。

即ち、將來、我國獨自に發達せしむべき科學工業の方向は、其の製品が海外諸國に喜んで迎へられる體のものたる事。本邦の少い資源を充分に活用し、海外よりは極力少量の資材の補給を仰ぐ程度にして、日本人の腕で加工の出来る高級な品物である事。農村も都市も之が生産に同様に參與し得るものたる事。同時に日本人の科學的教養を此の仕事を通して全般的に高め得るものたる事が望ましい。敢て新規な物を創製するの要はなく、舊來、既存のものに徹底的の再検討を加へても、此の一手を是非とも選び出し度いものではある。會員諸君、宜しく何を選定すべきかに就いて充分なる考慮を拂はれ度い。

3 戦争中は陸海兩軍部を先頭に、官廳が絶大の統制權を齎して一般技術界に細大の命令を下し、各種の學會共、其の獨自の活動は殆んど封ぜられて居たと云ふも過言でない。本邦に於ける通信事業は、近年逡巡信省が計畫より現業に至る迄總てを掌握してゐた爲、機器の製造以外、大多數の技術者、研究者が官廳に所屬してゐた事、特に本學會は大正3年、逡巡省技術者有志の集會たる電信電話研究會を母體として之より轉換した歴史を有する事から、其の抑々發會當初より、長く謂はゞ御用學會然たるの内容を持続して來た。其の後、通信事業の一部が民間に移され、又、高周波科學の急速なる進歩と、之に伴ふ通信技術の大發展とから、吾が學會も學會としての本然の姿を漸次に取り戻し、其の活動内容も愈々充實し來りつゝあつた。然し、戦争段階に入つて後は、他學會同様、學會として主動的活動を行ふ餘地なく、學會雜誌に掲載せんとする研究報告に迄も著しき掣肘が加へられ、又、各種の委員會の如き殆ど總て所謂開店休業状態にあつた事も事實である。而して今般終戦となり、國內の指導精神が自由主義的となつた今日では、學會としての立場が戦前に比し格段に其の重要さを増加した事を、會員諸君は特に自覺され度いと思ふ。

學會は會員相互に申合せた規約に従ひ、平等に會員諸君個々の支持する團體である。會員諸君の自

主的的活動が、其の儘直ちに學會の動きに反映されねばならぬ。換言すれば、技術界の自主的起動力は直接學會に現はれねばならない。本邦に於ける通信技術を將來如何なる方向に發展せしむべきか。通信研究の主要目標を何處に置く可きか、等は學會が中心となつて大いに論議する可きである。乃至は本邦將來の通信事業に關する技術的諸資料を蒐集し、検討を加へ、採否を論議して關係方面に提供する事、通信諸機器、諸裝置類の正しい規準、規格を制定し、純技術的立場より實際製品を批判し、之が改善進歩に資する事等々、學會の活動は、自主獨往、積極的に行はる可きであらう。自由主義的の見地よりすれば、純技術的活動の起動力、推進力は學會に在るのが最も妥當である。會員諸君は此の點を確實に認識せられ、各自夫々に充分なる責任を以つて、學會を通じて大いに斯界に活躍され度い。

4 我國は、全面的に戰に敗れた今日、總ての方面に亘つて新なる自由主義、平和主義的見地から、根本的の建て直しを行はねばならない。通信技術、通信工業に關しても當然此の方針を採る可きである。敢て言ふ。我國は現在既に四等國以下に墮したのである。技術界に於ても一流諸國と新規、最尖端なる技術を競つて空中樓閣を建んとするのは愚の骨頂であらう。夫よりも、先づ足元をしつかり踏み固めて、確實整正なる歩調を以つて、今一度直出さうではないか。譬へて云へば新しい天然色テレビジョン裝置を今慌てゝ作りかゝるよりは、全力を舉げて一般電話の充分なる擴充を計り度い。更に卑近なラヂオで云へば、高級な全波受信機を急いで作り出す事も一應は結構であるが、其の前にしつかりした、せめてスーパー受信機程度のものを先づ廣く普及させる事に努力し度い。

吾等は徒に國土の狹小を嘆いて居る可きではない。吾等は徒に人口の過多なるを苦慮してゐる時でもない。科學、技術に立脚した國民生活安定方法の確立こそは吾等技術者に負されてゐる當面の責務である。夫と同時に吾等は何を以つて海外諸國に吾等が淺慮輕舉の罪を謝し、將來の平和的交誼に報ゆ可きかを今から速かに考へて置かねばならぬ。

自然の愛好は日本人の天性である。平和を愛する良き自由人たり得るの素質に於て、日本人が他の國々の人達に劣るとは決して思へない。一日も早く、吾等の責務を果して、立派な實質を有する日本を再建し、平和な國々の仲間入りをさせて頂かうではないか。

筆者戰爭末期に計らずも會長の榮位に推薦せられ、最も光榮に感ずると同時に、此の難局に際會して、微力、果して能く其の任務を全うし得るや否や、自ら省みて甚だ忸怩たるものがある。驚馬に鞭つて畢生の力を致し、學會の再建に盡す覺悟であるが、會員諸君、庶幾くは充分なる御協力と御鞭撻とを吝まれざらんことを。(昭和20年10月21日記)